

バングラデシュの同郷会

——分布についての検討から——

高 田 峰 夫

(受付 2003 年 5 月 9 日)

は じ め に

バングラデシュには「ショミティ」と呼ばれる組織が多数存在する。通常、ショミティに対しては「組合」の訳語が当てられる。これは、1960年代に同国の東部、コミラにある農村開発アカデミーを中心として、村部の人々を一つのショミティの下に集め、そのショミティを通じて人々の生活改善・向上を図る、いわゆる「ショミティ方式」が農村開発の方式として広まったためである。ここで言うショミティは、日本や欧米の農協等いわゆる「組合」組織をモデルとして、そのバングラデシュ版として普及・振興が図られたため、通常ショミティと言えば組合組織のことだと考えられるに至ったわけである。バングラデシュはアジアにおける後発発展途上国の代表とされ、そこでは「援助の実験場」と呼ばれるほど多数の「援助」・「開発」プログラムがひしめいている。そのため、バングラデシュ国内外を問わず、同国に関する広義の社会科学分野の研究でも開発関係が圧倒的な比重を占めており、その結果、ショミティと言えば「ショミティ方式」のショミティ、すなわち「組合」だと考えられるように至った。この理解自体は決して誤りとは言えない。しかし、ベンガル語における「ショミティ」という語は、単に組合にのみ留まるものではなく、もっと幅広い意味合いを含んでいる。

本稿では、組合組織とは全く別の種類のショミティ、すなわちジェラ・ショミティ（県協会）、ウボジェラ・ショミティ（郡協会）等の「同郷会」

組織について取り上げる。同郷会とは、ある特定の地理的範囲を限定し、その地域の出身者が、その地域以外の場合（通常はその地域と離れた都市）において、同じ地域出身であるとの「同郷」意識を基盤として組織する任意団体、と定義することが可能であろう。その意味では、社会科学において広く研究対象とされてきた「ボランティア・アソシエーション」の一形態であると見なすことができる¹⁾。

1. 同郷会とその分布

初めに、以下で分析対象として提示する資料について簡単に説明したい（一覧リスト参照）。ここで取り上げた事例は、2000年12月から2002年10月までの新聞（主にジョノコント紙）広告欄に掲示された告知が中心である。また、若干数はプレス・リリースの方式で新聞・雑誌記事として報道されたものを含んでいる。これらの新聞雑誌は、全国紙・全国版であってもダッカで発行されているため、そこに掲載されている広告ないし記事は基本的には首都ダッカにおける同郷会のもののみである。名称には「何々県協会、ダッカ」のような形でそれが明示されている場合がほとんどであったが、煩雑になるのでその部分は削除した。ちなみに、ダッカ以外の地方大都市（チッタゴン、クルナ等）にも同種の同郷会組織があることは確認されているが、それを数量的に把握可能な規模で提示できないため、ここでは取り上げないことにする。

通常、同郷会についての告知広告はベンガル語の新聞雑誌にしか登場しない。同国では多数の英字紙誌が刊行されているが、それらの紙面には同郷会の存在を示唆するような広告も記事も全く姿を現すことがない。同郷

1) ここで「ボランティア・アソシエーション」論について概観する余地はないが、オーソドックスなまとめとして、LITTLE [1957], PARKIN [1966], BANTON [1968], KERRI [1976], 綾部 [1988 (1976)] 等を参照。また、近年では社会学や社会思想の分野で、公共圏の議論や NGO・NPO の議論と重ねる形で、再びボランティア・アソシエーションが注目されるようになっている。この点に関しては、とりあえず佐々木・金編 [2002] 所収の諸論を参照のこと。

会の告知広告とは地方出身者が同郷出身者に向けてだけ発する半ば閉じられたメッセージであるから、これは当然のことと言える。しかしその結果、英語媒体にのみ頼っている場合には、同国における同郷会の存在自体が全く目に触れないことになってしまう。さらに、広告等に関しても、全てのベンガル語媒体に均等に登場するわけではなく、その出現にはかなり偏りがある。具体的な紙名で言えば、ジョノコント、イッテファーク、ジュガントール等の新聞に集中する傾向がある。特にジョノコント紙には多数登場するため、同紙を中心に資料収集を重ねた。

なお、提示する資料には若干制約があることを明記しておかねばならない。具体的に制約として考えられるのは以下の諸点である。①筆者が目を通さなかった媒体（他の新聞や雑誌等）に掲載された広告・記事が含まれていないが、それらは多数あるはずである。②筆者が目を通した範囲であっても見落としの可能性はある。③そもそも商業的媒体にこの種の広報を一切せず、独自のルート（郵便、電話等）で連絡・告知を行なっている場合が一切含まれていないが、こうした事例も多数あると想定される。それゆえ、ここで取り上げたものは全体のごく一部であり、実際にはこれよりはるかに多い同郷会が存在し、かつ活動していることは間違いないと思われる。

2. 分布から見た特徴

前節で記したような限界を持つとはいえ、筆者がまとめた資料からだけでも、いくつか興味深い事実が判明する。また、それによって、ある程度はバングラデシュにおける同郷会の活動実態とその特徴が明らかに出来ると考えられる。始めにリストを参照しつつ、同郷会の分布から明らかになる特徴を押さえておきたい。

i) 非常に長い歴史

広告の中では、同郷会設立の周年記念式典を伝えるものがある。それに

一覧リスト

現管区名	旧県名	現県名	郡名	シヨミテイ名	広告日時	広告目的
Rajshahi	Dinajpur	Panchagarh		Rajshahi Bibhag Unnayan Samiti	2002/10/11	年次総会告知
		Thakurgaon				
		Dinajpur				
	Rangpur			Brihattar Rangpur Kalyan Samiti (same)	2001/3/20 2002/6/12	選挙告知 奨学生募集
Bogra		Nilphamari				
		Lalmanirhat				
		Rangpur				
		Kurigram Gaibandha		Kurigram Samiti	2002/3/3	総会兼役員選挙告知
Rajshahi		Joypurhat				
		Bogra		Brihattar Bogra Samiti (same)	2001/4/13 2002/6/19	年次総会告知 年次総会告知
		Naogaon		Naogaon Jela Samiti	2002/3/22 2002/4/4	交歓会日程変更告知 交歓会告知
		Natore		Chapai-Nabaganj Jela Samiti	2002/11/30	役員選挙告知
Pabna		Nawabganj				
		Rajshahi		Pabna Samiti	2001/1/25	75周年総会告知
				Sirajganj Jela Samiti	2001/3/30	選挙無効告知
		Sirajganj		(same)	2001/4/12	選挙告知
Khulna				(same)	2001/5/3	代表, 大臣と会見
		Pabna	Ishwardi	Ishwardi Kalyan Samiti	2001/5/4	加入招請
				Brihattar Khulna Samiti	2001/4/1	隔年総会告知

高田：バングラデシュの同郷会

Kushtia	Kushtia	Kushtia Jela Samiti (same)	2001/1/25	ピクニック実施告知
		(same)	2001/4/21	福引結果告知
		(same)	2002/4/18	ベンガル新年祭告知
		(same)	2002/4/28	奨学生募集
	Meherpur	Meherpur Jela Samiti	2001/2/3	選挙結果
Jessore	Chuadanga	Chuadanga Jela Samiti	2001/3/29	年次総会告知
	Jhenaidah			
	Magura	Magura Jela Samiti	2002/10/7	選挙告知
	Narail			
	Jessore			
	Satkhira			
Khulna	Khulna	Daulatpur Thana Kalyan Samiti	2001/8/3	隔年総会兼選挙告知
	Bagerhat			
Barisal	Barisal	Barisal Bibhag Samiti	2001/6/28	交歓会告知
	Bhola	Barisal Jela Samiti	2002/4/26	イード文化集会
	Jhalakati			
	Pirojpur			
Patuakhali	Barguna	Barguna Jela Samiti (same)	2001/2/22	殉難者に献花報告
			2001/4/28	選挙結果
Dhaka	Patuakhali			
	Faridpur	Rajibari Jela Samiti	2002/6/24	加入招請
	Rajbari	Gopalganj Jela Samiti	2001/7/29	総会開催報告
	Gopalganj	Madaripur Jela Samiti	2001/7/17	加入招請
	Madaripur	Madaripur Faundation	2001/7/12	加入招請
		Shibchar Thana Samiti (same)	2001/3/14	年次総会兼選挙告知
	Shibchar		2001/12/25	奨学生募集

Mymensingh	Shariatpur Jamalpur Sherpur Kishoreganj Mymensingh Netrokona Tangail Dhaka Gazipur Manikganj Munshiganj Narayanganj Narsingdi	Melandah	Melandah Thana Samiti	2002/8/30	総会兼選挙告知
Tangail Dhaka			Tangail Jela Samiti	2002/3/15	50周年記念集会告知
			Manikganj Samiti (same)	2002/2/12 2002/6/4	隔年総会兼選挙告知 選挙延期告知
			Munshiganj-Bikrampur Samiti (same)	2001/7/25 2002/6/30	年次総会告知 選挙告知
			Belabo Thana Samiti Jalalabad Association (same) Jalalabad Juba Samiti	2001/3/15 2001/2/22 2002/7/10 2001/1/12	年次総会告知 年次総会告知 総会兼選挙告知 総会兼選挙告知
Syleht		Belabo	Sunamuganj Samiti	2001/3/31	イーロード兼総会告知
Sylhet	Hobiganj Moulavi Bazar Sunamganj Sylhet		Comilla Samiti Brahmanbaria Jela Samiti Comilla Kotawali Thana Samiti Dakshin Chandpur Janakalyan Samiti Feni Samiti (same)	2001/2/13 2002/6/19 2001/8/4 2002/2/2 2001/2/20 2001/10/21	ピクニック実施告知 選挙結果告知 隔年総会兼選挙告知 投票権・立候補確認 奨学生募集 選挙日程告知
Chittagong	Comilla				
	Brahmanbaria Comilla Chandpur Feni	Sadar			
Noakhali					

高田：バン格拉デシュの同郷会

Chittagong	Lakshmipur Noakhali	Ranganj	(same)	2002/5/6	選挙候補支援求める
			(same)	2002/5/21	選挙告知
			(same)	2002/6/7	選挙後暫定措置
Chittagong	Chittagong	Patiya Sitakunda	Ranganj Upajela Samiti	2000/12/13	イフタール会告知
			Chattagaram Samiti	2001/5/23	奨学生募集
			(same)	2002/4/16	年次総会告知
CHT	Cox's Bazar Bandarban Khagrachhari Rangamati	Sitakunda	Patiya Samiti	2002/4/6	創設と委員決定告知
			Sitakunda Samiti	2002/1/30	会員更新・加入招請

よると、「タンガイル・ジェラ・ショミティ」(タンガイル県協会)の場合には2002年に50周年を迎えていることが判明する。また、「ジャララバード・アソシエーション」(ジャララバード協会)の場合には、すでに1997年に50周年を迎えている。最も古い例では「パブナ・ショミティ」(パブナ協会)が2001年に75周年を迎えて入ることが確認される。つまり、ジャララバード・アソシエーションの場合では印パ分離と同時に、パブナ・ショミティに至っては旧植民地時代に、その発生が遡るのである。

この事実から注目すべき点を指摘してみよう。①バングラデシュにおいて、と言うよりも旧パキスタン、さらには旧英領ベンガルにおいて、地方出身で都市に仕事を得て生活していた人々が相当数存在した。②それらの人々にとっては同郷意識が重要な社会的結合の原理として意識されていた。③ただし、当時はそうした人々の数が限られたためか、対象とする地理的範囲はかなり広く、具体的には、現在のバングラデシュの地理的範囲で言えば、6つある「管区」ないし20あった「旧県」の範囲が地理的な重要性を持っていたと考えられる。この点は、タンガイル・ジェラ・ショミティの対象が旧タンガイル県であること、ジャララバード・アソシエーションの対象が「ジャララバード」すなわち旧シレット県(現シレット管区)であること、パブナ・ショミティの対象が旧パブナ県であることから確認される。

ii) 続々と創設

同郷会は、長い歴史を持つ組織がある一方で、現在でも続々と新設されている。具体的に言えば、「ポティア・ショミティ」は2002年に創設されたばかりである。また、その他にも、現在「加入招請」を広告上で行なっているショミティは、恐らく創設から間が無いと想像される。具体例を挙げると、イシオルディ・コッラン・ショミティ、ラージバリ・ジェラ・ショミティ、マダリプール・ジェラ・ショミティ、マダリプール・ファウンデーション、シタクンド・ショミティ等々がそうした事例である。バングラデ

シュの国土に地理的制約がある以上、同郷会が次々に創設されると、いずれ飽和状態に至るのではないか、との疑問が湧くのは当然であろう。例えば、前項のように「旧県」を対象とする同郷会であれば、最大20までしか存在できないはずである。にもかかわらずこのように続々と設立されるのは、いかなるメカニズムによるのか。その点を明らかにするのが次に示す特徴である。

iii) 異なる地理的規模を対象にした同郷会が存在

同郷会には、広範囲を対象としたものが存在する一方、小地域を対象とした会も存在する。非常に広範囲を対象とした場合、「管区」全体規模の同郷会が存在する。具体的には、「ラッシャヒ・ビバーク・ウンノヨン・ショミティ」(ラッシャヒ管区発展協会＝ラッシャヒ管区)、「ブリホットール・クルナ・ショミティ」(広域クルナ協会＝クルナ管区)、「ボリシャル・ビバーク・ショミティ」(ボリシャル管区協会＝ボリシャル管区)、「ジャララバード・アソシエーション」(ジャララバード協会＝シレット管区)等。ここで確認できたのは4つの同郷会だけであるが、現在バンングラデシュには6管区あるから、可能性としては最大6つの会が存在するであろう。

他方で、小規模な地理的範囲を対象とした組合、具体的には「郡」²⁾(タナないしウポジェラ)を範囲とする会が存在する。例としては、「イショルディ・コッラン・ショミティ」(イショルディ福祉協会＝パブナ県イショルディ郡)、「ケショブプール・チャットロ・コッラン・ショミティ」(ケショブプール学生福祉協会＝ジェソール県ケショブプール郡)、「ドウラトプール・タナ・コッラン・ショミティ」(ドウラトプール郡福祉協会＝クルナ県ドウラトプール郡)、「シブチョール・タナ・コッラン・ショミティ」(シブ

2) 厳密に言えば、本来、タナは警察署並びにその管区を意味する。他方、ウポジェラは行政組織として設定された郡だが、しばしば組織改変があり、その度に名称も組織も変化している。ただ、基本的にはそれらの地理範囲が同じであるため、ここでは同一の「郡」として取り扱う。

チョール郡福祉協会＝マダリプール県シブチョール郡), 「メランダ・タナ・ショミティ」(メランダ郡協会＝ジャマルプール県メランダ郡), 「ベラボ・タナ・ショミティ」(ベラボ郡協会＝ノルシンディ県ベラボ郡), 「コミラ・コトワリ・タナ・ショミティ」(コミラ中央郡協会＝コミラ県中央郡), 「ラムゴンジ・ウボジェラ・ショミティ」(ラムゴンジ郡協会＝ロッキプール県ラムゴンジ郡), 「ポティア・ショミティ」(ポティア協会＝チッタゴン県ポティア郡), 「シタクンド・ショミティ」(シタクンド協会＝チッタゴン県シタクンド郡) 等がある。これらの小地域を対象にしたショミティは, 比較的歴史が浅いものが多いようである。また, これらの小地域を対象としたショミティでは, 少なくとも表現上では, 「コッラン」(福祉) と目的を限定した名称を冠する団体が幾つか見られることにも注目したい。ただし, 名称の違いだけで実態にそれほどの差はないようである。

iv) 複数組織の重なり

異なる規模の地理的範囲を対象にした同郷会が存在することから, 結果として, 同一地域で規模の異なるショミティが多数重なっている例が見られる。3 層構造になっている例としては, 「ラッシャヒ・ビバーク・ウンノヨン・ショミティ」(管区)―「パブナ・ショミティ」(現県)―「イショルディ・コッラン・ショミティ」(郡) の例が確認される。2 層構造の例は多数見られ, ほとんど全てが何らかの形で 2 層構造になっているとさえ言えそうな状況である。そのため, あえて個々に指摘することは控える。こうした事例は, 「タテ」の重複と言えるだろう。

他方, 全く同一の地理的範囲を対象に, 異なる同郷会が並存する例が散見される。例えば, 旧ボリシャル県(現ボリシャル管区) の場合, 「ボリシャル・ビバーク・ショミティ」と「ボリシャル・ジェラ・ショミティ」が存在する。また, マダリプール県の場合, 「マダリプール・ジェラ・ショミティ」と「マダリプール・ファウンデーション」が存在する。さらに, 旧シレット県(現シレット管区) の場合, 「ジャラジャバード・アソシエー

ション」と「ジャララバード・ジュボ・ショミティ」が存在する³⁾。これらは、いわば「ヨコ」の重なりであろうか。

上記いずれの場合も、ある特定の地域を例にとると、結果的にその土地出身の人物にとっては2重（ないしは3重以上の）帰属の可能性を生み出す。例えば、イショルディ郡出身者は、ラッシャヒ管区出身とも言えることから「ラッシャヒ・ビバーク・ウンノヨン・ショミティ」（管区対象）の会員になることも可能であれば、パブナ県出身者でもあるから「パブナ・ショミティ」（現県対象）の会員になることも可能であり、当然「イショルディ・コッラン・ショミティ」（郡対象）の会員でもありうる。これを逆に言えば、ある個人にとって、すでに帰属先となる先行組織がある場合、そこに後から何らかの形で重なる組織を創設することは、屋上屋を重ねることを意味する。それでもなお、あえて後発の組織が結成されるには、それなりの理由があるはずである。その意味及びメカニズムについては、3節以下で考察することにしたい。

v) 時期的な偏り

同郷会関連の広告や記事は一年を通じて現れるわけではないようである。実際ここで取り上げた事例でも、時期的に顕著な偏りが見られる。広告や記事の掲載時期を月別にまとめみると右の通りである。

一見して2月から4月に集中していることが明らかであろう。この時期は、バンングラデシュでは乾季後半に相当する。低温期は終わったが、雨季はまだ始まらない時期なのである。一般的に言って、天候予測もつきやすく、したがって集会等

1月:	4
2月:	8
3月:	9
4月:	11
5月:	5
6月:	8
7月:	5
8月:	3
9月:	0
10月:	3
11月:	1
12月:	2
合計	59例

- 3) この場合、ジャララバード・ジュボ・ショミティはジュボ（青年）と対象を限定しているので、必ずしも先行の2例と同列には語れない可能性もある。ただし、バンングラデシュの場合には、ジュボと明記されていても、実際には40代以上で髪に白髪が混ざるような人が含まれている例が多見されるので、実際には両組織の重なりはかなり大きいと考えるべきであろう。

を行ないやすい時期である。この時期には実際に政治運動や文化活動などが集中する傾向にある。この点は、後述する同郷会組織の設立目的や活動との関連で重要な意味を持つと考えられる。

なお、6 月にも 8 例見出せるが、広告目的から見てみると、選挙関連の広告が多いところから、具体的な集会そのものを目的としているのではないことが分かる。

vi) 広告の告知目的

広告の目的としては、圧倒的に年次総会（ないし隔年総会）の告知が多い。それに次いで、選挙関連の告知が目立つのが注目される。

vii) 具体的活動内容

告知広告の中には同郷会の具体的な活動内容を垣間見せる広告が散見される。リストの上段から順に抜き出してみよう。

例 1：奨学生募集。同郷会が資金を（主に会員からの募金等を積み立てた基金の形で）用意し、それを奨学金として当該地域出身の優秀な学生に供与する活動が行なわれていることを示すものである。

例 2：交歓会。同郷の出身者が、一堂に会して相互に親睦を深める場を設けている。

例 3：大臣と会見。同郷会の代表が、恐らく同一地域選出の大臣（国会議員でもある）を表敬訪問した報告。恐らく何らかの陳情を行なっていることを推測させる。

例 4：ピクニック。バングラデシュでは、特に乾季の気候の良い時期に、職場の同僚、所属組織等、特定の人間関係にある人々が、バスなどを仕立てて「ピクニック」と称する遠足兼（自炊の）食事会を開催する。ここでは同郷会がそうした事業の実施主体となっていることが確認される。

例 5：福引。バングラデシュにおいては公的機関が母体となり実施する宝くじが盛んであるが、それと並行してもう少し小さな組織が主体となり、

一種の福引を行なう場合が間々見受けられる。同郷会がその主体となっているのである。

例6：ベンガル新年祭。ベンガル暦の新年（パヘラ・ボイシャク）を記念し、一部では新年祭が行なわれる。ただし、バンングラデシュでは近年イスラーム色が強まっているせい、一般的にその担い手はヒンドゥー教徒が中心である感が否めない。ところが、インドの西ベンガル州に近く、バンングラデシュにおける「文化の中心地」を自認するクスティア県の同郷会は、この行事を意識して行なっていることがうかがわれ、興味深い。

例7：イード関連行事。イスラームの大祭であるイードに合わせ、いわゆるオヌスタン（一種の文化集会）が催される場合がある。その担い手に同郷会がなっている。

例8：殉難者に献花。独立戦争、もしくはそれ以前の言語運動に始まる一連の独立に向けた動きの中で、多数の人々が亡くなった。そうした殉難者に対し敬意を払う行動。

例9：イフタール会。ラマダーン月の日没後に「イフタール」と呼ばれる軽食を取るが、その会を同郷会が開催しているのである。

3. 活動から見た同郷会の特質

前節では同郷会リストに見られる特徴を簡単に指摘したが、本節では特にその中の「具体的活動内容」を中心に、同郷会の特質を検討してみたい。

i) 同郷会の政治的性格

例3は、同郷であることを梃子に、大臣に接近する試みを同郷会が行なっている事実を伝える事例である。

また例6は、クスティア出身の人々が、「文化の中心」として自らの独自性を誇る一種の示威行動、とみることができるばかりでなく、最近のベンガル新年を「非イスラーム的」とするイスラーム保守派の台頭に対して、あえて挑発的な行動に出ることで、そうした動きを批判する意図をも持つと

考えられる。政治的に言えば、リベラル色が強く、引いては親独立派的な色合いの強い、かなり政治的な動きと見ることも可能である。ただし、会員を見る限り、基本的にはムスリムばかりであるから、ここでの動きが宗教を超えて「同じベンガル人」意識、「同じクスティア出身者」意識に支えられた、つまりは「セキュラー」な意識の表現であるとは考えられず、あくまで「ムスリムである」ことを前提とした上での「政治的」目的から発したものであることが推測される

同様に、バングラデシュでは、リベラル対保守という政治的な立場の相違が、しばしば親独立派對反独立派（もしくは親パキスタン派ないしイスラーム原理主義勢力）と重ね合わせて語られる傾向が見られる。例8は、その意味で、明らかに親独立派（政党別で言えば、アワミ連盟支持派）の行動と見ることが出来る。

以上をまとめると、どのようなことが指摘できるであろうか。具体的な活動例の3, 6, 8から浮かび上がるのは、同郷会が実はかなり政治的意味合いを含んだ組織であるという、同郷会の隠れた側面である。「時期の集中」として指摘した特徴（2月から4月の乾季後半に集中する事実）は、この時期がバングラデシュではしばしば「政治の季節」⁴⁾とされている事実を考え合わせれば、けっして偶然ではないのである。同郷会がまさしく政治的色彩を強く持つからこそ、これらの時期に総会開催等の広告が集中するのだと言えよう。

ii) 同郷会の政治的性格と組織の重複

対象地域の規模に大きな違いがあるにせよ、全くの同一地域であるにせ

4) この時期が「政治の季節」とされるのは、気候の良さを反映してこの時期に政治集会やデモ行進が多発することだけにだけよるのではない。集会やデモでは他の政治集団との衝突や行動を規制しようとする警察等との衝突が多発し、しばしば死傷者が出る。その結果、それに対する抗議と自分たちの勢力誇示とを目的に、ホッタールと呼ばれる一種のゼネストが呼びかけられることが多い。これがさらに「政治の季節」を特徴付けることになる。

よ、特定の地域出身者を対象として複数の同郷会が存在する事実は、同郷会の持つこのような「政治的性格」を考えれば、容易に理解可能になる。つまり、先行する同郷会に集う人々とは別の政治的傾向を持つ人々（具体的には別の政党支持者）が中心となって、後発の組織が結成されるのではない。もしくは、元々は同一の同郷会に所属している人々が、主に出身地でのローカルな政治における立場の違いから、そして恐らくはローカルな場での政治的利権をめぐる争いから、相互に対立し、一方がその組織から飛び出し（または排除され）、新たな同郷会を結成するに至る、ということであろう。

同郷会に見られる別の特徴として、次々に新しい会が設立されていく傾向があることを指摘した。これも、以上の点を踏まえれば、首肯しやすくなるであろう。政治は、一般的には中央の政治、国政レベルの政治が注目を浴びるが、そればかりでなく多様なレベルでの政治があり得る。管区レベル、県レベル、郡レベル、さらにはそれ以下のレベルでの政治。大都市（この場合は首都ダッカ）への出郷者が集まり、同郷会という一つの組織を結成するのであるから、そこにはすでに一定数以上の人々が同じ地理的範囲から同じ目的地（都市）へ進出し居住していることが物理的前提となる。恐らく当初はそのような人々の数が限られていたであろうから、広い地理的範囲（管区ないしは旧県）を基盤とした組織が初めに立ち上げられたと考えられる。時間を経るに従い、徐々に出郷者も増えると、より小さな地理的範囲を基盤とする組織であっても結成が可能になる。そうすると、より地元（出身地）に密着した政治的事柄をめぐり、出郷者たちの間でグループ分けが明確になり、それに対応してより小さな地域（現在の県ないしは郡）を基盤とする新たな組織が結成される、というプロセスが一方で考えられる。これは、いわば「下位区分型」の細分化である。他方では、都市の膨張に伴い、同一地理範囲からの出身者が増えると、その人々の間での政治的グループ分けが徐々に明確になり、それに対応してまったく同一の地理的範囲を基盤とする新たな組織が別に結成される、とのプロセスが考

えられる。こちらは「同位区分型」の細分化と言えよう。いずれにしても、このような形で次々に新しい組織が結成されてゆくことになるのであろう。これらの側面から見れば、同郷会を結成することは、すなわち新たな政治組織を立ち上げることを含意する。かつてある勢力のスローガンであり、今なお間々耳にする言いまわし、『党派なくして力なし』(*jader dal nei, tader ksamata nei*) とは、まさしくこうした現実の反映であろう⁵⁾。

iii) 同郷意識と宗教

具体的活動内容の中には、交歓会、ピクニック、イフタール・パーティー等の、いわば社交活動が見られた。

例4のピクニックは、極めて日常的に親しい、もしくは接触の多い人々と共に行くことが普通である。にもかかわらず、それを同郷会が催していることからすれば、同郷出身であることが、そうした「日常的で親しい」もしくは「接触の多い」人々との間の人間関係と勝るとも劣らない強い人間的紐帯の基盤であることが明示されていると考えられる。

イスラームのラマダーン月は断食月である。ムスリムたちは、1日の日の出(正確にはその前の祈りの時)から日没までは一切の飲食を行なわない。その代わり、日没後は正式な夕食が整うまでのつなぎの意味も込め、イフタールと呼ばれる軽食を取る。同じムスリムとして、その日1日の断食という試練を乗り越えたことを互いに確認し、食物を口にすることができる喜びを共有するため、イフタールには友人や知人を招きイフタール・パーティーと称する社会的交流がなされる。また、これに合わせてしばしば政治的な目的や特定の社会的目的からパーティーが催されることも多い。その担い手に同郷会がなっているのである。

いずれの場合も、「同郷」出身である事実、さらにはお互いが同郷出身者

5) ただし、こうした複数の組織の並存・対立には、政治的要素とは別の側面があることも考える必要がある。すなわち、バングラデシュ・ムスリムの間で顕著に見られる特異な「個人主義」的傾向の反映、との側面である。

であるとの相互認識が、こうした親密な交わりの基盤を提供しているのである。これは交歓会の場合も同様であろう。言い換えれば、ここには出身地域（バングラデシュの言葉で言えばデシュ [*desh*, クニ]）を基盤とする人間関係の親密さが見られると言える。

ただし、こうした親密な関係は、実は誰に対しても同様に開かれているのではない。あくまでもムスリムのみに関わられたものである。例7と例9から、同郷会は、「同郷」という地域ベースの組織ではあっても、事実上、会員がほぼムスリムのみに限られていることが分かるであろう。また、イフタル・パーティも、確かに1日の断食という試練を乗り越えた共感と喜びとを分かち合う場であり、一種の社交場ではあるのだが、そこでは、同じ「ムスリム」として断食を行なっている、との実践ないし事実が前提条件になっている。したがって、実のところそこにムスリム以外の者が入り込む余地は極めて限られている。イフタル・パーティに客としてムスリム以外の人間が招かれることはあるが、残念ながら彼らと同様の喜び、連帯感を分かち合うことはできないのである。そのことは、一般的にイフタル・パーティが「ドワ」（アッラーへの感謝の祈り）とセットになっていることを考えれば、容易に理解できよう。

つまり、一方で同郷会は確かに同郷（同じデシュ）出身であることを基盤として成立する組織ではあるのだが、他方では、その同郷出身者全てを包含するわけではないのである。むしろ特定の宗教コミュニティーに属すること、ムスリムであることが、同郷出身者であることと同等かそれ以上の大前提になっている。ここから判明するのは、地域（デシュ）に先行ないし優先して「ムスリムである」ことが、ある個人の最大の規定要因になっている事実である。

4. 個別事例から見る同郷会の特徴

次に、個別事例を検討することにしたい。これにより、リストからだけでは明らかにならない同郷会の特性が、より明確に浮かび上がるはずである。

i) 選挙関連

始めに非常に生々しいやり取りを伝える「シラジゴンジ・ジェラ・ショミティ」の例を見てみよう。ジョノコント紙2001年3月30日付け紙面に掲載された告知の全訳である。

「ダッカにあるシラジゴンジ県協会の執行委員会は、去る2001年3月15日の会議で会員の2／3の決断による2001－2002年度協会執行委員会選挙のための現執行委員会主導による早期の選挙実施ができなかったため、それまで（選挙が実施されるまで）当該選挙に関する選挙未成立（関連）条項の9条によりエンジニア・S・マニルザマンを招集者として9名の会員代表による臨時委員会が設置された。この件については去る2001年3月25日付けプロトム・アロー紙並びに2001年3月26日付ジョノコント紙に告知が掲載された。上記臨時委員会はすぐさま新規に選挙に必要な作業を開始した。去る2001年3月25日付けでジュガントール紙を通じ、本日2001年3月30日に、いわゆる自称選挙委員会がS・アリ氏とかいう人物主導で選挙を実施するとの告知がなされたが、本日2001年3月30日に選挙は行なわれない（下線ママ）。かのS・アリを（現）執行委員会当局は（選挙委員に）指名していない。（本日の）選挙に関連する全ての作業を中断するよう、選挙に（作業や投票で）関与する全員に要請する。さもなければ法に沿って対応をするであろう。

M・A・サッタール，事務局長，
シラジゴンジ県協会，ダッカ」

この文章からは、いくつかの事実が確認できる。①同協会の執行委員会が次期執行委員会の役員選挙のために会議を召集したが、そこでは（恐らく委任状による）会員の2／3の賛成が得られなかったため、選挙実施が延期されたこと。この背景に、恐らくは会員の中で主導権争いがあり、現執行部側と反対勢力との間で激しい多数派工作がなされた様子が透けて見える。②その結果、予定していた時期（現執行部の任期切れ）までに選挙が実施できない場合に関する規定により、選挙実施に向けて検討する臨時委員会が設置された。この委員会は現執行部側が主導するものであること

は想像に難くない。③臨時委員会設置の事実を現執行部はプロトム・アロー紙とジョノコント紙に告知広告を出した。④それとほぼ同時に、S・アリと称する人物が独自の選挙委員会を主導して執行委員会「選挙」を実施する告知広告をジュガントール紙に出した。このS・アリと称する人物は、現執行体制に対する反対派の中心人物の1人であろう。⑤その正式の手続きを経ていない「選挙」を阻止するため、現執行部側はジョノコント紙上に「選挙」に参加しないよう呼びかけ、仮に参加した場合には訴訟も辞さないと警告する告知をジョノコント紙に出した。それが上に訳出した文章である。

これらは、同郷会内部で激しい主導権争いがあること、それが議長等の役員選挙の場で顕在化すること、そのために選挙結果をめぐって裁判沙汰にまで至る場合があること、等の事実を示している。しかも、そこにはより大きな政治的対立がほの見える。具体的に言えば、現執行部側やそれに味方する人々が中道左派ないしリベラル派であるのに対し、反対派の側は中道右派ないし政治的に中立な人々である可能性が高いのである。その点は、双方が告知広告を出している掲載紙の政治的色分けに現われている。ジョノコント紙とプロトム・アロー紙は、同国の中でもかなりリベラル系であり、それが紙面にハッキリと現われるのに対し、ジュガントール紙は中道でありながら、それぞれの時点での社会的な腐敗を追及することで部数を伸ばしている。その批判対象は官僚や経済界、警察などが中心で、政党に対してはやや距離を置いている。政党の色分けで言えば、前者はかなり明確にアワミ連盟寄りであるが、後者はそれほど明確ではない⁶⁾。この事

6) ちなみに、ごく最近の報道によれば、政府広報の広告出稿数で、日刊ディン・カルが第1位、インキラブが第2位、とある（The Daily Star 紙インターネット版2003年3月6日記事）。前者が現連立与党第1党であるBNPのご用新聞であり、後者が連立与党の重要な要素であるイスラーム原理主義政党の代弁者であることは周知の事実であるから、これは当然と言える。その後の順位を見て行くと、第6位にジュガントール紙が位置するのに対し、プロトム・アロー紙は15位で、ジョノコント紙は順位表に出てこない。これも、現政権から見た新聞メディア各紙の距離感を正直に反映していると言えよう。

例は、同郷会と政党政治との微妙な関係を浮かび上がらせるものと言える。

類似の例は「フェニ・ショミティ」の場合にも見られる。同協会では選挙に関連する告知が立て続けに出された。特に、2002年6月7日の告知では、選挙結果をめぐる裁判になり、裁定により、選挙結果は当面棚上げにして、再選挙を行うまでは現状維持（つまり現行の執行委員会体制のまま）で活動が続けることが告知されている。

これらは、フェニ・ショミティやシラジゴンジ・ショミティのみに見られる特殊な状況であるとは考え難く、むしろ同郷会に広く見られる一般的傾向であると思われる。同郷会リストに見られる同郷会広告の「告知目的」欄を見ると、最も多いのが「総会」並びに「選挙」である。総会ではしばしば次年度の執行部体制を決める選挙が行なわれたり、もしくは選挙結果に基づき新旧執行部交替の引き継ぎが行なわれるようである。これを考えると、実は同郷会広告の大部分は選挙関連のものであると言って良い。言い換えれば、同郷会の関係者にとって執行部役員選挙はそれだけ大きな関心事なのである。だとすれば、同郷会内部で主導権争いがあることも、それが選挙の場で顕在化すること、時には（裁判沙汰になるほどまでではなくとも）結果をめぐる大きな争いになることも、何ら不思議はないことになる。

ii) 地元への利益誘導

事例①：ブラモンバリア・ジェラ・ショミティ

2001年2月28日の、広告欄ではなく、一般紙面のベタ記事に次のようなものが見出された。「ダッカのブラモンバリア・ジェラ・ショミティ（県協会）代表、A. A. カーン博士は、昨日発表した声明の中で、鉄道大臣 M. A. ホセイン、（政府）道路・鉄道部門次官、並びにバングラデシュ国有鉄道に対し、3月2日から703（号）首都・ゴドゥリ都市間急行が（ブラモンバリア駅に）停車するようになったことについて、感謝の意を表明した」。

ごく小さな記事であり、さりげない表現であるので、つい見過ごしそうであるが、この記事には非常に興味深い点が含まれている。

ブラモンバリアは、首都ダッカから北東約 100 km に位置する中規模の地方都市であり、バングラデシュ東部方面に向かう場合には通過点になっている。かつては音楽を中心とする文化都市としても知られ、それなりの重みを持っていた。しかし近年、他の中規模地方都市が徐々に発展を遂げる中で、これといった産業も見られない同市は、逆にジリジリと沈滞しつつある感を免れない。そのため、急行列車の通過ルート上にあるのに、常に素通りされるばかりである。こうした事実を背景にして、ブラモンバリア県や市の当局、並びに地元住民たちは、かねてから急行の停車を求めてきた。これは地方都市当局・住民ならばどこでも必ず行っている行動であり、それ自体は全く目新しくない。ところが、この記事によると、ダッカの県協会代表が、わざわざ声明を出して、停車の実現に関し感謝の意を表明している。そこから推測すると、かねてより県協会としても、政府当局にその種の働きかけをしてきたのであろう。と言うよりもむしろ、首都ダッカに位置し、政府当局ならびにその関係者に直接働きかけることが容易なのは県協会であるから、これまでは県や市の当局者以上に県協会幹部が、いわば「窓口」ないし直接のパイプとなって働きかけを行ってきた、と考える方が話しの筋としては分かりやすい。

つまり同郷会組織（この場合は県協会）は、単なる出郷者の交流親睦団体ではなく、同時に出身地の地元利益を誘導・実現することを目的とする組織であり、また、その具体化のために働く有力なチャンネルである、と考えられるのである。

事例②：シラジゴンジ・ジェラ・ショミティ

それだけを見ると何の意味も持たないように見える報道も、上に述べた観点から見ると、全く異なる意味を帯びてくる場合がある。その一例がシラジゴンジ県協会の活動を報じた広告である。2001年5月3日付け新聞の

広告欄に、コラム式に囲み、写真入りで、大きく「シラジゴンジ県協会、ダッカ」と題した広告が掲載された。同郷会関連の広告で写真入りは極めて稀である。しかも、同郷会が各種の告知を行う場合に比べ、広告のサイズがかなり大きく、さらにその半分以上のスペースを写真が占める異例の形式を取っている。ただし、広告の内容自体は取り立てて珍しいものを含んでいるわけではない。

「当協会の2001-2002年度新規選出議長 M・S・イスラム氏及び執行委員会の全委員が去る2001年5月1日、内務（大臣）兼郵政電信電話通信大臣 ハッジ・M・ナシム殿と会見で面会した。会見で大臣殿は協会の発展に向けた議論で熱意を表明し、かつ、（面会者）全員に健全なる委員会執行のためアドバイスを下された」との文章と共に、議長と思しき人物が大臣に表敬の花束を渡している写真が添えられている。

このさりげない広告から何を読み取るべきか。第1に、花束贈呈の写真から、同協会執行部と大臣とが友好関係にあること、もしくは相互が友好関係を確認したことを内外に周知させる狙いがあることは間違いない。第2に、恐らく大臣はシラジゴンジを選挙区とし、そこから選出された人物であることが推測される。そうでなければ、内外にこうした写真を広めても、何ら実質は伴いがたいと考えられるからである。第3に、大臣の担当が内務だけでなく郵政電信電話通信であることに注目したい。バングラデシュの新聞や雑誌の投書欄には頻繁に、「何処何処には郵便局がなく住民が不便な思いをしているから郵便局を設置して欲しい」、「電話がなかなか繋がらずに苦勞しているので、回線を増やして欲しい」等の陳情ともつかぬ要望が掲載されている。大臣のさじ加減一つでこのような問題はすぐに実現可能であるがゆえに、これらの案件を担当する郵政電信電話通信の大臣は有力な利権ポストを握っているとも言える。第4に「協会の発展に向けた議論で熱意を表明し」との部分に注目したい。協会自体の発展に大臣が熱意を表明したところで、実際にすることは限られている。せいぜいダッカにある協会の事務所に電話がなければ、その設置に便宜を図る程度のこ

とでしかあるまい⁷⁾。しかし、先のブラモンバリアの例で見たように、協会が出身地シラジゴンジ県の窓口となり、ダッカでの陳情活動を行なっているとすれば、話しは全く変わる。大臣がシラジゴンジ県全域に多少なりとも関係する郵政電信電話通信関連事業で利益誘導を行なうことを暗に認めたとまではいかなくとも、「お話しは承った」程度のことがあったからこそ、わざわざこの一文を入れたのではないか。そのように考えれば、通常と同郷会関連の告知広告より大きなスペースを取り、わざわざ写真入りにした異例の措置をとった理由、そのために相当の出費を払った理由もある程度は理解できるのである。

ジェラ・ショミティに代表される同郷会組織が、このような中央政界等との窓口になっているとすれば、中央政界の側からも地元に対する働きかけ、いわば地元対策のチャンネルとして同郷会が利用されることも十分にありうるであろう。いずれにせよ、出身地の官庁や地方政界と中央政界との間を直接仲介するのは同郷会幹部である。ただし、両者を仲介するためには、その前提として当該幹部が類似の政治的傾向を持つことが必要であろう。その結果、同郷会自体がその特定の政党色を帯びることは避けられない⁸⁾。先に記した「同郷会が政治性を持つ」との指摘は、このように考え

7) この広告が掲載された日付を見ると、先に引用したシラジゴンジ・ジェラ・ショミティの執行委員会役員選挙をめぐる激しい主導権争いから約1ヶ月後に当たることが判明する。つまり、反対派が独自に断行しようとした「選挙」を抑え、旧執行部が正規の手続きを経た役員選挙を実施し、その結果選任された新執行部であることになる。この新執行部が旧執行部の流れを引く主流派であることはほぼ間違いない。旧執行部がやや中道左派寄りであったと推測されることから、新執行部も類似の傾向を持つ可能性が高い。他方、現在の連立与党はBNPを中心とする中道右派傾向にあり、当然大臣もそれら連立与党の一員であるから、大臣は政治的には反対派に近いと見られる。その場合、この会見とにこやかな花束贈呈は一種の政治的「手打ち」であった可能性も排除できない。

8) ただし、こうした傾向、特定の政党との関係は必ずしも固定的であるわけではない。政治家の側は個人の利害でしばしば所属政党を変えるし、また、政党とは

れば当然のこととも言える。また、こうしたやりとりがなされる過程で、当該政党の方針とは意見を異にする人々、もしくは具体的に異なる政党の支持者たちが、それに反発することは必死である。当初は内部での分派行動を取り、議長を始めとする執行委員の選挙で自分たちと政治系傾向が同じ人物を選出するように画策するであろう。同郷会の広告で告知目的の中心となっているのが代表や執行委員会の「選挙」告知である事実、また「フェニ・ショミティ」の例に典型的に見られた選挙をめぐる激しい応酬、これらは、同郷会内部の問題であると言うよりは、むしろ場合によっては同郷会が持つ地方と中央を結ぶパイプとしての性格が影響し、同郷会外部の要因が同郷会内部に引き起こす主導権争いの結果だとさえ考えられるのである。それでは選挙で好ましい結果が得られなかった場合はどうなるか。反対派にとってみれば、当初は内部に留まり、何とか次の選挙を狙うであろうが、選挙で見込みがなくなってきた場合、内部に留まることは厳しい状況を意味する。内部で非主流として常に従属的な立場に立つことを余儀なくされるからであるし、政治的には自分たちの主義主張とは異なる組織の一部として、同意しかねる事柄にでも嫌々同調することを強いられるからでもある。そのような状況に耐えるぐらいなら、いっそ組織の外に出て、自分たちだけで独自の組織を作ろうと考えるようになるのも不思議ではない。同郷会が続々と増えていること、しかも同じ地理的範囲を対象として複数の同郷会が存在する事実の背景には、このようなプロセスが介在すると考えられる⁹⁾。

➤ 別に個々の政治家は常に自己の支持基盤強化を目指している。それゆえ、同郷会のような組織の実権を握った勢力は、それまでの支持政党所属ではなくとも、同郷出身の有力議員と相互の利害が一致すれば「手打ち」をすることがありうるのである。

9) そもそもバングラデシュの政党政治においては離合集散が顕著であること、その背景に「オレがオレが」という強い自己主張と自己利益追求とを核とする特異な「個人主義」があることは、別の論で指摘した〔高田1998〕。だとすれば、同郷会においても類似の傾向が見られるのは、むしろ当然のことであろう。

iii) 周年記念式典関連

事例①：タイガイル・ショミティ

同協会は、創設50周年記念行事として国立博物館の広場を使用して集会を開催した。そこでは「オヌスタン」(文化行事)を行なうと告知されている。主賓として環境大臣(恐らくタンガイル出身者)が招かれている。ただし、集会だけに留まらず、50周年になったことを記念して、当日の集会開催前に、会場から全国記者クラブ(の建物)までデモ行進することを予定しているから参集するように、との呼びかけがある。すなわち、このデモ行進を行なうことにより、①ダッカの人々にタンガイル・ショミティの存在と歴史の古さを誇示し、②引いてはタンガイル出身者のダッカにおける存在を誇示した上で、③(わざわざ全国記者クラブを終点にデモを行なうのであるから、そこで何らかのアピールないしプレス・リリースを行なうと考えられることからすれば)同協会の存在と活動とをメディアを通じて全国にアピールする、等の目的があると考えられる。

事例②：パブナ・ショミティ

内輪の行事に留まらず、「パブナ祭り」の名で大々的な祭典を2日間に渡り開催。それを大きな広告で一般に告知し、ぜひ見に来るように求めている。興味深いのは、その場で大きく分けて2つの分野でプログラムが組まれていることである。第1は、「ラティ・ケラ」(パブナ地方に独特の棒を使ったスポーツ)、「アンチョリック・ガン」(パブナ地方の民謡)、「文化オヌスタン」(恐らくは、パブナ地方出身者による踊りや器楽演奏、詩の朗読、等)。第2は、「(パブナ)県のサリー、ルンギ(男性の腰巻)、ギー(精製バター)、ドイ(甘いヨーグルト菓子)、ミスティ(甘いお菓子)等のメラ(物産展ないし大市)」。

前のカテゴリーは主にパブナ地方独特の伝統的な活動に関連するものであり、後のカテゴリーは同地方の名産品ばかりを列挙したものである。これは、一般の人々の間に、「パブナと言えは何々(遊び、唄、産品等)」の形で、「地域イメージのパターン化」が出来あがっている

ことを示唆する。実際、バングラデシュの人々と話しをしている際、ある物品が話題になると、すかさずそれを名産とする地方の名が挙げられ、逆に、ある地方の名が話題になると、すぐさまその地方の人間（の特徴）や名産品が口の端に上る。

つまり、パブナ・ショミティの事例から、一定の地理的領域（デシュ）に、このような「パターン化（ないしステレオタイプ化）した地域イメージ」があること、そのイメージの上に同郷会が活動を繰り広げる場合があることが明らかになるのである。他方、それとは逆に、同郷会の活動によってそのような「地域イメージ」が強化され固定される可能性もあることにも注目したい。

iv) 同郷会間の相互交流

事例①：メランダ・ショミティ

同協会の告知広告には興味深い点が見出せる。総会とそれに合わせた役員選挙に関する広告なのだが、総会の主賓には（元陸軍）大将で現経済計画大臣が、特別ゲストとしては、①ジャマルプール3区選出の国会議員、②ダッカ・ジャマルプール・ショミティの会長の名が明記されているのである。主賓は地域出身の最も大物らしき人物であること、特別ゲスト①がそれに次ぐ地位の人物であること、またメランダ郡がジャマルプール県の一部であること等を考え合わせると、同郷会には一定範囲（この場合は「郡」）出身者が政治的序列を基にピラミッド型に統合され、それによって特定の目的に向かい活動する組織としての側面があることを推測させる。

同時に、特別ゲスト②に注目したい。そもそもメランダ郡の上位に当たるジャマルプール県からの出身者により結成されているのが「ジャマルプール・ショミティ」だと考えられるが、前掲リストにその名前は見出せない。この事実は、リストに載らないショミティが多数存在するはず、とした本章冒頭の推測を実例によって裏付けているのである。

それと同時に、ショミティ間の交流の事例としても注目したい。通常、同

郷会相互の交流はほとんど見られないようだ。しかし、この場合のように地理的に見て下位（＝小規模な範囲＝この場合は郡）にあるショミティは、上位（＝広域＝この場合は県）を対象とするショミティと、少なくとも年次総会のような場では（代表をゲストとして招待するといった限定的な形であれ）相互交流を図っていることが確認されるからである。これが逆の場合はどうなのか、すなわち上位団体から下位団体への働きかけがあるのかどうか、その点に関して次の事例は注目すべきものである。

事例②：ボリシャル・ビバーグ（管区）・ショミティ

ショミティの執行部選挙のために、事前に意見交換会・交流会が開催されたことを報じる記事が新聞に掲載された。このこと自体は珍しくないが、注視すべき記述がある。ボリシャル管区全域を対象とするこの協会の役員選挙を円満に実施に移すため、ボリシャル管区内のジェラ・ショミティ（県協会）やウポジェラ・ショミティ（郡協会）の代表たちがその席に招かれた、というのである。出席者のうち、個別に氏名が記されているのは国会議員や省庁の次官、次官補等々の名ばかりで、実際のところどれだけのジェラ・ショミティやウポジェラ・ショミティから代表が出席したか判明しないのは残念である。

ともあれ、この記述が正しいとすれば、前掲のメランダ・ショミティの場合とは逆に、上の（対象規模の広い）同郷会が下の（すなわち対象規模の小さい）同郷会に配慮している例と見られる。つまり、日常的な交流の有無ははっきりしないとしても、このような重要な場面では、限定的ながらも同郷会間の相互交流が行なわれていることが確認できる。ただし、「代表たちがその席に招かれた」との部分を見ると、あくまで同郷会という「組織」として限定的に相互交流しているだけで、実際にある個人が規模の異なる複数のショミティに多重帰属しているわけではないように思われる。この推測が正しいとすれば、複数のショミティに多重帰属する例が見られないこと自体が同郷会の別の特徴になっているのかもしれないが、この点に

ついては一層の検証が必要だろう。

v) 学生の同郷会組織

学生にのみ対象を限定した同郷会組織が存在すること、またそれをめぐって争いがあることが明らかになる事件報道がある。

2001年2月24日のジョノコント紙に「ダッカ大学構内のケショブプール・ショミティ集会に銃撃、負傷3名」のタイトルで記事が掲載された。長い文章なので、ポイントだけを要約すると、①事件の前週にジェソール県ケショブプール郡出身者が作る「ケショブプール学生福祉協会」の新執行委員として代表と副代表にダッカ大学内ショリムッター・ホール（学生寮）の学生が選出されたが、②そのことを契機に以前からの執行委員選出をめぐり争いが激化し、③金曜日に大学構内で同大学内スールジョ・セン・ホール（学生寮）とショリムッター・ホールの学生が衝突し、3名が銃弾で負傷した、というのである。

バングラデシュでは国立大学の場合、一般に地方出身の学生たちは大学構内に点在するホール（学生寮）で寄宿する。ホールには、通常その創設者ないし創設理念にちなんで著名な人物の名がつけられるが、その後、今度はその名称により入寮する学生の色分けができる傾向にある。この場合で言えば、第一次ベンガル分割当時のムスリム側を代表する人物であったショリムッターの名にちなんだショリムッター・ホールには、現在でも中道右派からイスラーム原理主義的傾向の強い学生が多いとされる。他方、スールジョ・セン・ホールについては確かな情報がないが、ヒンドゥ教徒の名を冠していることから推測すれば、比較的セキユラーないしリベラルな学生が多いと見て大過ないであろう。学生たちが多かれ少なかれ政治に関心を持ち、その結果、大学内では既成政党の学生組織が強い影響力を持つこと、同時にそれらの学生組織はある程度まで個々のホールを拠点にして活動しているのは周知の事実であることからすれば、ショリムッター・ホールの学生たちは中道右派政党ないしイスラーム原理主義政党支持もし

くはその下部にある学生組織のメンバーであり、他方、スールジョ・セン・ホール（Suljo Sen Hall）の学生たちは中道左派からリベラル派政党の支持者であることが推測される。なお、記事に掲載されている事件当事者たちの個人名から確認する限り、両派とも（その全てではなくとも）大部分がムスリムであることは間違いない¹⁰⁾。

以上の知識を基に考えると、おおよそ次のようなことを指摘できるであろう。①大学内にも同郷出身であることを基盤にする同郷会組織が存在する。②そこには多数の学生が関与し、その中で主導権争いが生じている。③その際、所属するホール別に党派分けができるらしい。ホールがある程度まで独自の性格を持つこと、また、その場合に学生組織と政党組織との密接な関係があることを考えれば、そうした色分けはある程度まで支持政党の別ないし政治的志向の別を反映していると考えられる。④基本的にはムスリム学生の間での争いである。以上をまとめると、学生の同郷会は、基本的には一般の同郷会とほぼ同様の特性を持つと見る事が出来るであろう¹¹⁾。

5. 複数の地理的範囲を持つ意味

「分布から見た特徴」の中で、同郷会の「長い歴史」を指摘したが、当時（50～75年前）の同郷会の設立対象とされる地理的範囲は、ほぼ「管区」ないし「旧県」であった。そこから推測すれば、当時人々にとって「クニ」（デシュ）とはほぼそれらの地理的範囲を意味していたのではないか。パプナ・ショミティを例にとって言えば、彼らにとっては未だ「パキスタン」

10) 大部分が愛称で記載されていたために、一部にムスリムだと断定できない名称があったが、同郷会一般の傾向から類推すると、恐らくここでも関係者は全員ムスリムではなかったかと考えられる。

11) 学生の同郷会と一般の同郷会がどのような関係にあるのか、その点に関する資料は見出せていない。ただ、一般の同郷会の場合、他の同郷会とそれほど相互交流を行っていないと見られるところからすれば、学生の同郷会と一般の同郷会との間の交流はそれ以上に限定的であると考えられる。

もなく、ましてや「バングラ・デシュ」は想像の中にさえ存在しなかったはずである。ようやく漠然とした形で「ベンガル (バングラ)」が意識されるようになっていたらしいことは S. W. アリの著作の中で確認されるものの (高田 [1996, 1997] 参照), それが果たしてどこまで具体的な形になっていたのか、はなはだ疑問と言わざるをえない。だとすれば、当時の人々にとって、「クニ」(デシュ) とは、その「最大範囲」でもせいぜいこうした「管区」ないしは「旧県」程度の範囲を漠然と意味するものでしかなかったのではなかろうか。

ただし、同郷会は「管区」や「旧県」だけを成立基盤とするわけではない。その後、時間が経つにしたがって続々と同郷会が創設されてゆく。そのようにして増え続けた結果、現在では多数の同郷会が存在するに至ったし、その数はまだまだ増える傾向にある。しかし、多数になった同郷会ではあるが、組織が成立する基盤、すなわち「同郷」とされる地理的範囲に着目してみると、基本的には大別4レベルに分類可能なことが明らかになる。すなわち、大きい方から小さい方へ順に、①管区、②旧県、③現県、④郡、の4つである。

このうち、管区に関しては、そもそもそれが後に導入・設定されたこと、また一部の地域ではそれが旧県と同一範囲であること (例えば広域シレット)、さらに、現在でも管区昇格を求める運動が各地で活発になされ、その結果、今後もその数には変動 (恐らく増加) の可能性があること等の点を考えると、必ずしも安定した単位とは見なせないとの異論があるかもしれない。ただ、名称がどうあれ、現在「管区」とされている地理的範囲は、おおまかにはバングラデシュ国内における地理的区分 (主に3大河川とその支流により境界づけられる) とほぼ一致していることに注意する必要がある。すなわち、ラッシャヒ管区 (=北西部)、クルナ管区 (=南西部)、ダッカ管区 (=中北部)、ポリシャル管区 (=南部)、シレット管区 (=東北部)、チッタゴン管区 (=南東部) である。また、これらの地理的区分が、歴史的に見ればそれぞれ異なる展開を遂げてきたことに注意する必要がある。

それゆえ、あえて「管区」と言わず、むしろ地理上の区分という意味での「地方」と考えれば、その「地方」出身者独自の地理意識に基盤を提供することは十分に理解できるのである。

他方、現在64ある県（現県）は、1981年にそれまでの副県が昇格して登場したものであり、社会的認知は徐々に進んでいるものの、歴史の浅さは否定しようがない。続々と数が増えている同郷会であるが、県によってはその県を対象とした同郷会が未だにないところもあるのは、こうした事情によっているのであろう。歴史の浅さと社会的な認知の低さは、人々の自己意識に根ざす部分の弱さを反映する。それとは逆に旧県は、旧パキスタン時代どころか、印パ分離のため若干の変更はあったものの、基本的な枠組みは英領時代にまで遡るため、常に強く意識されているようである。一例を挙げると、旧コミラ県は現在ではコミラ県、チャンドプール県、ブラモンバリア県に3分されているが、チャンドプール県やブラモンバリア県出身者に「デシュ・コタイ？」（クニはどこ？）と出身地をたずねると、大抵の場合、最初に出る答えは「コミラ」なのである。つまり、記憶の中において相対的に安定した地理上の範囲としては、現県は旧県に比べてかなり劣ると言わざるを得ないのである¹²⁾。

郡に関しては、それが持つ意味は個々の地域的事情により大きく異なるようである。だが一般的に言えば、同郷会全体の中で郡が持つ意味は限られているように思われる。事実、同一の郡出身であることを基盤とした同郷会は、同郷会の数がこれだけ増えてきたにもかかわらず、わずかに10に留まり、しかもその大部分は比較的最近登場したばかりであることは、先に指摘した通りである。ただしその一方で、明確に郡とは言えずとも、自分の出身地として狭い地理的範囲が重要性を持つことは十分考えられるし、

12) ただし、ここではいわゆる「メンタル・マップ」を問題にしているのではない。むしろ、人々の自己認識ないし自己規定との関わりでどのような地理的範囲が重要視されているのか、または特別の意味を持つのか、そうした観点からこの問題に焦点を当てている。

その上に行政上の区分としての郡が重ね合わせられることも十分ありうるであろう。

いずれにせよ、同郷会の分布と、以上の考察から、人々の意識の中ではいくつかの地理的範囲が重層的に重なる形に横たわり、それがクニ（デシュ）として特別の意味を持っているらしいことがうかがわれるのである。それを大まかに記せば、①地方（ほぼ現在の「管区」相当）、②旧県、③比較的狭い地理的範囲（一部では郡とほぼ重なるか？）、とまとめることが可能ではないか。言わば「三層構造」的な意識の層が想定可能ではないか、と推測されるのである。換言すれば、人々の「クニ」（デシュ）意識には明らかに「重層性」があることになる。また同時に、そうした重層性は、ある程度の「具体的な形」（管区／地方、旧県、郡／小地域）を伴ったものである、とも言えるだろう。

おわりに

本稿では、同郷会の告知広告から、同郷会の分布とその特徴を検討してみた。検討の結果を大雑把にまとめれば、以下の諸点が特徴として指摘できるようである。バングラデシュでは同郷会の存在が広がっていること。長い歴史を持つ会が存在する一方、続々と新しい会が生まれていること。それらの組織は複数組織が重複する形になっていること。そこに同郷会が持つ政治的性格が関わっていると考えられること。会の運営をめぐる激しい闘争が見られるが、それも会の政治的性格と関連するらしいこと。地域を基盤としつつも宗教的帰属（ムスリムであること）が大前提になるらしいこと。同郷会が一部の人々の親睦団体としての性格を超えて、地元と中央とを結ぶチャンネルとしての性格を有するらしいこと。同協会の活動の背景に「地域イメージのパターン化」があり、それが会の活動によって逆に固定化されているらしいこと。会の存立基盤である地域意識を探ると、そこに「クニ」（デシュ）の重層性が見出せること、またそうした重層性にはある程度の「具体的な形」が伴っていること、等々である。

同郷会内部の問題，特に会の組織構造と会の性格との関連について，事例研究を通じ検討することが必要であろうが，すでに紙数は尽きた。今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 綾部恒雄，1988（1976），『クラブの人類学』アカデミア出版会，京都。
- BANTON, Michael, 1968, "Voluntary Associations: Anthropological aspects", in David L. SILLS ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 16, pp. 357-362.
- KERRI, James Nwannukwu, 1976, "Studying Voluntary Associations as Adaptive Mechanisms: A review of anthropological perspective", *Current Anthropology*, 17-1, pp. 23-47.
- LITTLE, Kenneth, 1957, "The Role of Voluntary Associations in West African Urbanization", *American Anthropologist*, 59, pp. 579-596.
- PARKIN, D. J., 1966, "Urban Voluntary Associations as Institutions of Adaptation", *Man* (N. S.), 1, pp. 90-95.
- 佐々木毅・金泰昌編，2002，『中間集団が開く公共性』（公共哲学7），東京大学出版会。
- 高田峰夫，1996，「バングラデシュ・ムスリムのアイデンティティーに関する一試論——歴史的概観による再検討——（前編）」『広島修大論集』37巻1号（人文編），pp. 219-255.
- ，1997，「バングラデシュ・ムスリムのアイデンティティーに関する一試論——歴史的概観による再検討——（後編）」『広島修大論集』37巻2号（人文編），pp. 339-370.
- ，1998，「バングラデシュ——民主化は定着するのか——」，佐藤 宏・岩崎育夫編著『アジア政治読本』東洋経済新報社，pp. 255-268.

Summary

Jela Samities in Bangladesh: An essay on a kind of the “voluntary association” with reference to its spatial distribution

TAKADA Mineo

Generally speaking, both local people and foreigners in Bangladesh see the word “*samiti*” as somewhat similar to “cooperatives”, because there are a lot of development projects in Bangladesh and, historically, such projects adopt cooperative groups as the means of development tools for those programs. But “*samiti*” can connote much more broad range of meaning in local usage in Bangladesh. Roughly speaking, “*samiti*” means “voluntary association”, and another one of such an important category is “*jela samiti*” or the similar types of it. “*Jela samiti*” is a kind of voluntary association and the members of the *samiti* consist of the people from the same locality, such as *bibhag* (division), *jela* (province), *upajela* (county), union (local administrative village), etc.

This study mainly analyses notices or public announcements at the advertisement pages in local newspapers and magazines written and published in Bengali. To see the list of those notices, one can easily find the following points as the main characteristics. That is, some *samitis* have relatively long history. The number of the *samitis* is growing. Concerning the locality or area of *samitis*, there is some difference of the sizes of those localities, i.e. some *samitis* only orient very small area such as union, other *samitis* direct very large area such as division. If we see from the bottom, i.e. from the small geographical (and, in some cases, administrative) area to the broader one, we

can find the existence of the plural *samitis* in the same area, etc.

Taking these characteristics into account, the author depicts the following points as main findings. If we think about the vague characteristics of the *samitis*, it is rather surprising that the *samitis* have strong political character. They often function as a petitioner or a representative of a local area which is the base of those *samitis*, and exert some influence on the world of politics in the national level. Furthermore, such political character is not limited to the outer direction only. The same power also directs to the inward. Inside a *samiti*, we can observe strong factionalism and this will partly explain the growing number of *samitis* as a group division arising from the inner political struggle. Another hidden aspect the *samitis* have is the membership. Though, of course, there is no formal rule or literally expression, in reality the membership is limited to the Muslim only. Therefore, *jela samitis* are the group of Muslim people who come from the same locality. That is, the religion and locality are two important criteria of the membership.

As the background of the activities of the *jela samitis*, we can find a "stereotyped image of a locality" in Bangladesh and this image seems to be reinforced by the very activities of the *samitis* to some degree. Moreover, if we delve into the people's consciousness of locality which forms the *samitis*, we can find the multiple strata of *desh* (one's own locality) there. Such multiplicity takes the shape of "concrete areas" to some degree; a very small area, the area almost same as the old *jela*, and the area almost similar to the divisions.